



宮の花街

はな
まち

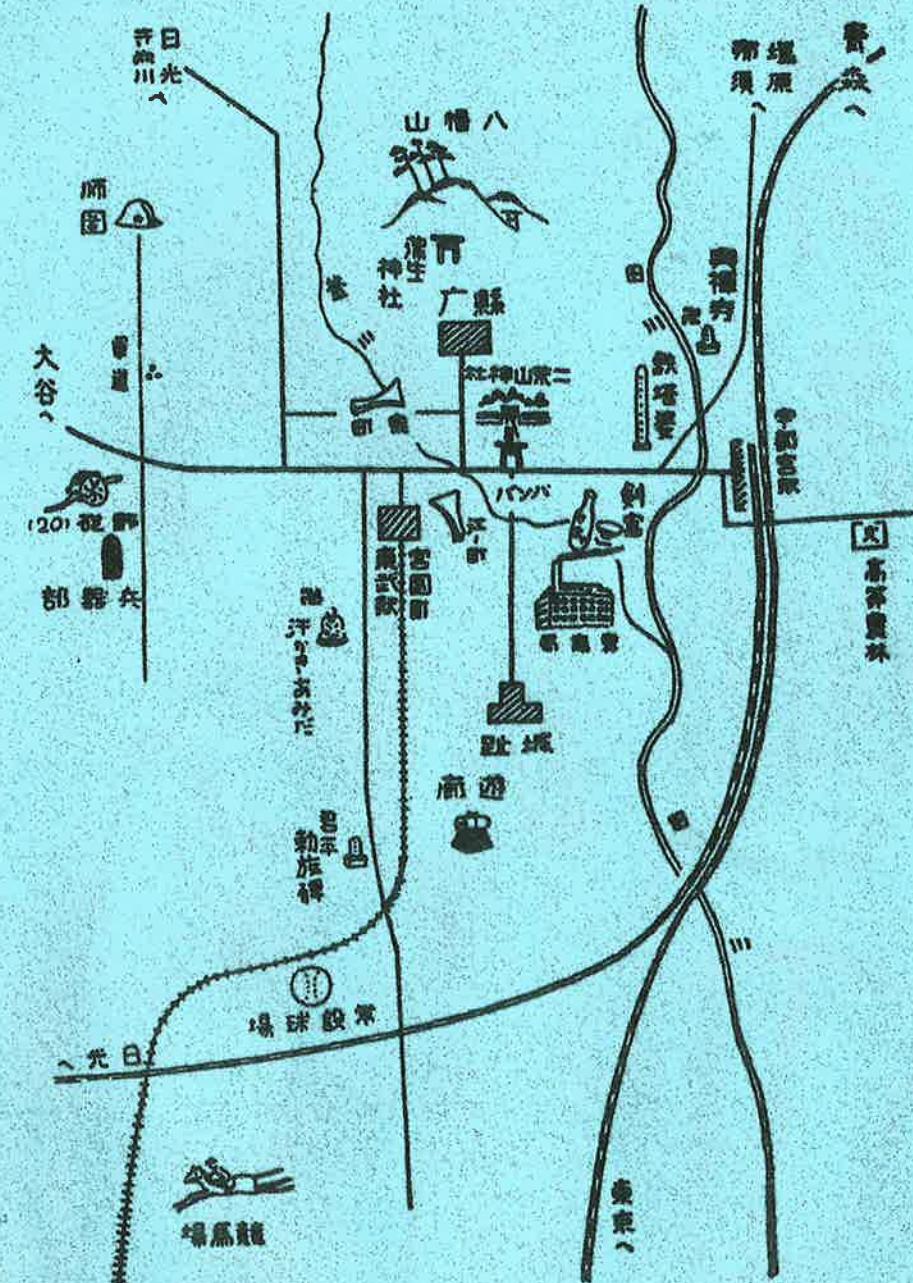
次 目

藝宮宮遊力劍待料旅おお傳宮宇
 姥盆 フエーの理 祭みや
 小音 エー・酒
 名踊
 篪唄唄頭廓場宮合店館りげ説り昔

二四二一三二二〇九九八七六四二

附 娛樂とリゾート
 汽車主要都市へ乗車時刻表
 錄 那鹽川鬼怒川須原治温温泉泉
 大谷觀音
 以呂波見番高砂見番中央見番
 附 近の名所

三三〇 元元毛六齒三三二〇八七



宇都宮

は帝都を去る二十八里餘の北、栃木縣の中央に位し、人口約九萬、栃木縣廳の所在地

第十四師團の衛戍地にして、北關東一大都市である。往古「池邊郷」中古「小田橋驛」とも呼ばれ後宇都宮と稱せらるゝに至つたが、その由來年代等は諸説紛々として詳かでないが、當國一の宮たる二荒山神社の鎮座により、人傳へて一の宮を宇都宮と轉訛したるものならん。往昔は勿論一小邑に過ぎざれども一の宮の鎮座により驛次次第に開け、奥羽の關門として自然發展を見たものであらう。後冷泉天皇の康平六年藤原氏の嫡流、石山座主宗圓が下野守護職となり宇都宮社務職を兼ね苗名を宇都宮となし城廓を構へてより人家逐年増加、宇都宮家の勢威と共に宇都宮の名著しく現はる。

興亡流轉約八百二十年、十五家四十七代の城主の交代はあつたが、その間各城主とも神社を修め、佛寺を起し産業を奨め以て土地繁榮の招致に努めたるを以て、宇都宮城下の膨脹發展の勢運を招くに至つた。

然るに、さしも泰平の恩澤に浴せし宇都宮も戊辰の兵燹に罹り、四十八ヶ坊の大半を一朝にして焼土と化すの悲惨事に遭遇せしも、町民は銳意復興、更生の活氣に燃え明治十七年栃木縣廳は宇都宮に設けられ、十八年に東北鐵道開通、二十三年には日光線開通され、次いで二十九年四月市制布かれ、四十一年に第十四師團の設置を見、大正二年に專賣局、昭和七年東武鐵道の開通等ありて俄然一大發展を來し、舊來の面目を一新し、昭和二年に都市計畫の指定を受け將來の勢運を約束さるゝに至つた。

宮のほこり

嘗つて二十八萬石の御城下、小江戸の名として顯著なるものも頗る多い、今その二、三を記さう。

二荒山神社（國幣中社）……市の中中央白ヶ峰に鎮座、祭神は豊城入彦命である。下野一の宮として延喜式内に列し、古來宇都宮大明神として、朝廷を始め武將の崇敬高い。社殿は明治十年に改築せしものにて、老杉大樹鬱蒼として全市を一望のうちに收め遠く關東平野を俯瞰し筑波加波の秀峰に對し風光絶佳である。

蒲生神社……宇都宮市の生んだ偉人蒲生君平先生を祭る。寛政の三奇人、山陵誌の著者、勤王家たる君平先生こそ我郷土のほこりである。社殿は市の北郊八幡山公園にあり、土地高燥にして遠く秀嶺男體に相對し頗る眺望に富む。又、明治二年朝廷、先生の遺功を追賞せられ命じて市の南郊南新町に「勅旌忠節蒲生君平里」の碑を建つ。嗚呼聖恩の優渥なる、枯骨光を生じ更に光榮を添ふ。

宇都宮城趾……僅かに本丸跡と外濠の一部を遺すのみ。城堡湟池は殆んど拓かれ大道四通し昔時の面影を見ず只二の丸の大櫻は樹齡一千年に及び、陣太鼓の轟き渡つた往時の標示として市民に親しまれてゐる。

八幡山公園……市の北郊丘陵にある自然の公園である。近來市の施設の見るべきものあり、春綠夏涼秋紅冬雪と四季何れにもよく。鬼怒の銀河、關東の綠野の眺めは實に關東の名公園である。四時遊山するもの頗る多し。

軍道の桜……市の西郊を走る里餘の坦道で兩側に櫻樹數千本春は花と電燈に彩られ、觀櫻客日に拾萬と言ふ。

傳 説

としたものは極めて多く、今その總てを記す
るの煩を避けてその二、三を記さん。

宇都宮釣天井……戀の大工與四郎と愛人お稻の悲戀を偲
ばしむる、講談宇都宮釣天井は三才の児童さへ知る處で
あるが、正史になく遺憾ながら眞と爲し難い。而も城主
本田正純は稀に見る名君であつたと傳へられてゐる。

淨瑠璃坂の仇討……三大仇討として淨瑠璃に講談に餘り
に有名なるこの仇討の發祥地は宇都宮である。奥平家の
家老奥平内藏丞同隼人の同人が亡主の百ヶ日の法要の際
今泉町興禪寺にて焼香争ひより事起り、江戸の淨瑠璃坂
にて仇を報ゆる迄五年、幾多の波亂を包んでゐる。内藏
丞の墓は興禪寺に今猶ある。

其他

……鴛鴦塚・訴人婆吉枝・宇都宮明神の援兵・大豆

三粒の大佛・成高寺天狗等々。

おみやげ にもいろいろあるが、千瓢はその冠たるもの
のであらう。すしによし煮つけて珍味、漬
けては干瓢漬、からし漬、友白髪となり富貴の里、千瓢
羊羹も好かれてゐる。外皮を細工したものに瓢細工、炭
取に塵取に風雅を見せ、茶器に煙草盆に又はお面等にそ
の郷土色を多く發してゐて而も價は頗る低廉である。宮
下駄は古典味あり、夏宵の散歩には是非すゝめ度い。デ
パートで盛んに賣出されてゐる宮染中形は歌磨の繪畫を
偲びしめるものがある。扇子、團扇、傘、日傘等の進出も
目覺しい。又餅では香り豊かな宮の餅がある。古くから
知られてゐる名物に吉原棒あり、傳説に因んだ鶴天井風
味形に詩を思はせる長生羊羹がある。園藝に於ては、こ
この臯月は天下に冠たる名物である。

お祭り

宇都宮はお祭りの多いところ、賑かなところである。トコトコトコと響く太鼓は全くこゝの名物であり旅人の耳底に深く刻まれて消えぬ響だ。

おたりや祭 || 冬：十二月十五日 春：一月十五日

火ぶせの神恩あらたかで近郷は勿論遠く縣外よりの参拜者多く、左義長も行はれて郷土色の濃いお祭である。

菊水祭 || 十月廿八、九日催される關東の大祭で、その前日行はれるは流鏑馬(やぶさめ)、二日間に亘る神輿渡御の規模の大なる、多數の美事な山車や屋臺と共に他に見られぬ殷賑さである。

商業祭 || 本市商工業の發展を祈願し祝福するもので十一月廿、廿一の二日間全市聯合賣出しである。

其他お祭は極めて多く太鼓の音は殆んど四時絶ることがない程である。

旅館の主なるもの

(イロハ順)

店

名

町名

電話番號

白清白結藤藤丸山河板稻い
木江井
木屋水屋城屋江屋下内
木本本ホテル本店屋治店館屋屋ほ
木本店屋

傳川川材小川池小馬杉大川旭
馬向木向木上金原工向町町町町町町

二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、
一、八、三、五、六、四、七、九、三、九、七、
三、五、六、四、七、九、三、九、七、九、一、九

料理店の主なるもの

(イロハ順)

水

か

市外大谷旭泉町

店

一
八田

百都駒宮藏

城す運本會

本屋し嘉並店館野村屋駒屋壽鳥館ほ

江材一馬池曲池一旭小池大池泉
野木一條坂上師上工上工上工上工
町町町町町町町町町町町町町町

二、二、二、三、二、二、二、二、二、二、
一、四、一、八、四、三、七、三、二、一、五、一、
八、二、二、二、三、三、三、三、三、三、三、
一、四、一、八、四、三、七、三、二、一、五、一、

待合の主なるもの

(イロハ順)

稻一と友お花叶群たや八柳

重よぬてのきみ

飘穂わ家い月家喜代ひ喜

江野町一條町
松ヶ崎町江原町
池上町西塙出町
元石町松ヶ峰町
江野町上町
野町上町

三、三、二、二、二、三、二、二、三、三、二、三、
六、九、六、九、六、九、六、九、七、八、六、八、
六、九、六、九、六、九、七、八、五、九、八、八、
六、九、六、九、六、九、七、八、三、六、八、
六、九、六、九、六、九、七、八、四、七、二、
六、九、六、九、六、九、七、八、三、六、八、
六、九、六、九、六、九、七、八、三、六、八、

松ふ福富藤駒駒清明紀みみみ新松住住住

士くの保三喜よまや喜いのよ

喜べ家藤四廣野川文しつこ樂竹し井香

旭池上町一條町尾上町泉江野町野田町
松ヶ崎町江原町池上町松ヶ崎町江野町
町上町町上町町上町

三、二、二、三、三、二、二、二、二、二、三、三、
六、九、二、四、五、九、一、三、二、二、
六、九、一、八、六、一、五、一、八、一、六、一、
六、九、一、八、六、一、五、一、八、一、六、一、
六、九、一、八、六、一、五、一、八、一、六、一、
六、九、一、八、六、一、五、一、八、一、六、一、

劍の宮

俗に言ふ銘酒屋。今小路、劍宮、中河原の三町に跨る料亭百餘軒、酌婦二百餘名。釜川を挿んでネオンの蔭に咲く妖艶な美花は脂粉の香を漂して粹密の情に春の唄を歌つてゐる。景は宇都宮の不夜城の一つである。水に流れる赤い燈、明滅する青い燈は終夜遊子の心を樂しませ、若鮎の様な彼女等は旅人的情に溶けルージュの唇からは戀のさゝやきが聞かれるであらう。

カフエー・酒場

は全市に散在し其の數無慮。宛然ジヤズの響に覆はれてゐる觀がある。そゝ豪華なる、蕭洒なる、雅かなる艷かなるありて遊心をそゝつてゐる。

青丹の燈もがすかに綠葉の蔭に戀の胡蝶は翻り、妖しくも裝ひたる乙女と青緑のグラスをかたむける甘美なる夢の一時はジヤズの音と共に更けるを知らぬものがある。

カフェー・酒場の
主なるもの

ミ丸松金ツ第よ蝶東がパエイ
一八う一ビカ
ドリス家鈴メ駒き々軒ンタスは
公會堂精養軒

旭宮中河原町
寺宮池一條町
江曲上野町
野師町
塘田町

二、三九二
二、三九三
三、五九〇
三、二七六
三、二七七
三、二七九

都美進眞ミ三結三三サ三吾アテゴコ
里喜清人ノヤノ笠城共崎口陽妻カンンンロ
喜館軒座軒ス軒屋亭軒ン軒家ネラヤ

馬一鐵杉江曲一大杉曲江材曲
場條跑原野野野野野野野野
町町町町町町町町町町町町町町

三、三三四、二、三一八
三、三三四、二、三一九
三、五八三、二、三一九
三、三三四、二、三一九
三、三三四、二、三一九
三、五八三、二、三一九

遊廓

紅燈綠酒に美女を擁して人生の醍醐味を味ふ
はこゝだ。喫茶やダンスの設備もある。

電話

電話

三、一七〇
二、七三七
二、八四七
二、九七七
二、八〇三
二、七八六
二、三六八

旭佐錦
泊一等並
泊一等一時間
代遊興
木盛
樓樓

三、三五〇
二、三三五
二、三四八

小福現萬大大賓博初梅

松和金年盛海泉來泉音長

樓泉樓樓樓樓樓樓樓

二、三九〇
二、二七七
二、二七七
二、二七七
二、二七七
二、二七七
二、二七七

特一等並
一等一時間
泊一等泊

六、〇〇
四、五〇
三、二一
三、八六六
〇〇〇錢

宮

音

頭

「遠近の望む詠は二荒の御山つゞきと深雪積雲を色とる
紫の景氣を見やる下野の都と銘を宇都宮

「まづ立初める春霞野邊も長閑にほらくと花美名姿を
うつろいて我に見ゆるか鏡が池の水しわるみて釜川の渡
りに舟の竿させば下ろ瀬早き瀧の水流れくて北河原集
ふてこゝに睦み合勇ましき御魂を祀る下の宮八幡山は皇
夫の赤き心をうす墨の櫻に染しいさをしを守る日本の神
の庭かけし誓もはづかしいうぶないろはの兼事しかたい
ちぎりし石の坂昇りつめたる懸のくせ額に赤根のさしも
ぐさ根なし草とは仇口なそしてさかさにひぞりごとわけ
も何やら宮音頭

「お國名物大谷の石よエ眞岡ざらしの脈ふ織地エ宮の千
瓢とり合もエ地物より品麻では鹿沼エ足尾は銅山紙から
す山

「足利織物かづくござるエ佐野の染縞綿糸織地エ益子
ひどやき男女子が繭の糸とりは織唄をエ集ふて唄ふはや
りうた

「岩の蛤りやテモめづらしいあじやりあさりの川のそこ
ヨイ

「恨やましいほど中河原これも結ぶの上河原 ヨイ

「祝ふまんどう龜井の楓君は千歳の鶴の井戸 ヨイ

「さまに大谷のその願がけに七里河原もかちはだしヨイ
ヨイ ヤナおもしろや

「唉揃ふ野山美し花の中老も若いも生めいて浮れ拍手の
千鳥足醉ふた氣げんで時代なけんも打つはやして櫻がり

にぎわしや

「當地に名高き風景は縣の司町くの軒場脈ふ繁榮はい
く千代かけて目出度けれど千代かけて目出度けれど

宮 小 嘴

一、こゝは名に負ふ玉くしげ

その二荒の二荒の神の守りの宮の町

「誰も来て見やよつて

見やそしてお手を字

都の宮」

二、花は櫻木人は武士
その軍道に軍道に咲くや櫻の花の雲音
三、名にし大谷の觀世音
その石山に石山に堅い誓ひをかけ守り
四、武士の鑑は蒲生さん
それよ明石は横綱は横綱は志賀之助

藝妓名鑑

以呂波見番

△ハ半玉

電 二四五・二〇〇

小 松 家

出生地

万 和 竹
丸 丸 丸

初岸の家

二九七三

堺 飄
小 夜 子
小 梅
いろは

君 勇
家 三五六八

△桃太郎枝郎勇

初初濱太
太郎東京

まり子玉家
三三二

米 牡丹
奴本
△國太郎
君太郎

△律太郎
太郎子
君太郎

辰 夏 子 米
新常盤家
福山城家
文菊梅太
富子郎香
△つばめ
△ちやめ子
本 三五三
△六九

平廻家 二八八五
金子家 梅奴
やま子
兼太郎
富の家 二四六七
△文富
利家 丸丸
△貴久松
太郎松
△太郎山
太郎形
太郎福島

宮盆踊唄

宮の名所は二荒さんよ

おがむその手で盆踊り

昔なごりの釣天井も

夜は踊りの輪に更ける

馬場はよいと泣く子も笑ふ

勇士ぢや君平櫻ぢや軍道

お月さまさい花に出る

夏は涼しい千波河原

石で名高い大谷の名所

音頭取るのは宮染浴衣

柄も揃ふた踊りッ子

若岸の家	△梅市	小ひなはん	△市若子	△東京	栃木
榮榮榮	△太榮	△茨城	△茨城	△茨城	栃木
分宮迺家	三龍	△東京	△東京	△東京	栃木
兩	栃木	茨城	栃木	栃木	栃木
玉代 II 一本 40 錢	△太榮	△茨城	△茨城	△茨城	栃木
間半ハ六本、以後十五分ヲ増ス每ニ一本ヲ増スモノトス(遊興税ナ含マズ)	△千代	△千代	△千代	△千代	栃木
ハ卅分ヲ増ス每ニ一本ヲ増スモノトス(遊興税ナ含マズ)	△千代	△千代	△千代	△千代	栃木

千代花本	秀の秀の	照の秀の	秀の秀の	千代花本
千代菊	千代菊	千代菊	千代菊	千代菊
菊代	菊代	菊代	菊代	菊代
福島	福島	福島	福島	福島
群馬	群馬	群馬	群馬	群馬
栃木	栃木	栃木	栃木	栃木
金	金	金	金	金
登代	富	玉	二	東
本	勇	とり	二	三九三五
堺玉	堺玉	堺玉	堺玉	堺玉
春	春	春	春	春
小竹	松	平	九	知興迺家
鈴	松	九	松	二五八九
新潟	新潟	新潟	新潟	新潟
栃木	栃木	栃木	栃木	栃木
茨城	茨城	茨城	茨城	茨城
都賀家	都賀家	都賀家	都賀家	都賀家
三太郎	三太郎	三太郎	三太郎	三太郎
新潟	新潟	新潟	新潟	新潟
みた芳勝松	みなか豆子子榮已榮	みた芳勝松	みなか豆子子榮已榮	みた芳勝松
新初崖乃	新初崖乃	新初崖乃	新初崖乃	新初崖乃
以	以	以	以	以
大分	大分	大分	大分	大分
福島	福島	福島	福島	福島
栃木	栃木	栃木	栃木	栃木
都	都	都	都	都
賀家	賀家	賀家	賀家	賀家
三三八二	三三八二	三三八二	三三八二	三三八二

中央見番

△ハ半玉

駒

家

福松朝日

松朝日

二七八

翁

家

三五六

愛子千葉

喜代松子

照北

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

三九六

喜代松子

日出子

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

喜代松子

日出子

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

喜代松子

日出子

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

喜代松子

日出子

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

喜代松子

日出子

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

喜代松子

日出子

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

喜代松子

日出子

春の家

三六一

豆千代

まち子

和の家

三五七

梅翁

駒家

ノ乃家

玉代ハ一本50錢(半玉35錢)

以後卅分ヲ増スニ一本ヲ増スモノトス

(遊興稅ヲ含マズ)

娛樂とりぐ

キキマジ劇場

○印は劇場

○花屋敷

パンバ

四〇五
新

○歌舞伎座

パンバ

三、〇三二
二、七四〇

○電氣館

パンバ

二、三〇九
一、〇三三

○宮樹亭

パンバ

四、〇三三
一、〇三三

○帝國館

パンバ

二、七四〇
一、〇三三

○宇都宮競馬場

パンバ

四、〇三三
一、〇三三

○市外西川田

パンバ

二、三〇九
一、〇三三

○高地方競馬中屈指の馬券賣

パンバ

一、〇三三
一、〇三三

附近の名所

名勝大谷

宇都宮から西へ一里、自動車で十分。
山あり、川あり、四時月雪花の眺めあかね

宇都宮市郊外唯一の遊覧地であると共に我國建築用材界の翫者たる大谷石の産地でもある。

石切場 こゝは到る處石の洪水だ、地の底から湧き起る石切りの音は先づ遊覧者の歩みを呼びとめる。この勇ましい音こそ帝都大震火災に唯一の耐震耐火の建築として名聲を博した帝國ホテルの用材採掘の響だ。數十丈の断崖に危ふげにかかる天狗の投石。麓の曲水は弘法大師の姿を映せしと傳ふ姿川、清流には銀鱗の躍るを見る。

大谷觀音 天開山と號し坂東十九番の札所。本尊は千手觀音菩薩で弘法大師の作と傳ふ。又岩面に十七尊を彫鑄しあり大師一夜の作とす。日本三石佛の一なり。

お止山 境内の西側の仙境なり。畏くも 大正天皇、皇太子にましませし折兩二度の行啓を仰ぐ。御手植の松ある頂上よりの眺め頗る絶佳、遙かに日光の連峯を指呼のうちに收められ小妙義の稱あり。

遊樂園 お止め山に對し、春は若葉に、野沙に、つゝじに、秋は紅葉に常に變化ある眺望の地である。九十九折の坂徑を登れば富士見臺の名ある頂上に至る。富士、筑波の秀峯に對するを得、眺望又極めて絶佳なり。

名産 大谷石、建築用材として年産三百万圓
名物 松茸、大谷せんべい、羊羹

日光

海拔千七百五十呎の高臺にあり、宇都宮より一時間にて國立公園日光に達するを得る。

自然と輪換の極美として世界の公園の賞ある桃源の仙境である。峯巒あり、湖水あり又瀑布あり、而もその殿堂の美たるか壯麗華美の極である。天空を摩す巨杉二萬本は數里に亘りて並木をなし、大谷の清流に架せる朱の神橋は龍宮城を想はせる。「日光を見ぬうち結構を言ふな」は古い言葉だがまさに日光を表現する語だ。古色蒼然たる淨域に金銀珠玉の結構美を探らんとする者四時絶ゆるなし。大谷の溪流を遡れば名に負ふ御澤の大渓。遠く般若方等の二瀑を眺め白樺の幹に映る陽も懐しく大平の展望あり、白雲の飛沫を受けて下れば轟々百雷の如く四山を動かす名瀑華嚴の偉容に接する。

中禪寺湖 は周七里、水あくまで清澄にして湖底を知らず樹木鬱蒼として靈峯男體を湖心に倒にする。宜なるかな明治大帝の御感にかなはせられ御巡幸の砌り畏くも「幸の湖」の名を賜はらるを。こゝより菖蒲ヶ濱を通り奇瀑龍頭の瀧を経て、傳說の高原、高山植物の寶庫戰場ヶ原に達すれば日光諸峯は相連なつて一大パノラマを展開し日光山嶽美を恣にすることが出来る。更に蒼潤滴らんとする湯の湖に進めば俗塵を去つた靜寂境湯本温泉がある近時アルピニストやスキーヤーの根據地として名あり、高壯なる旅館ホテルあり、四時常に賑ふ。

日光小唄

見ざる 聞かざる 言はざると そんなら
物を思はざる むかしのわたしに かへしやんせ

鬼怒川温泉

宇都宮より約十里、自動車一時間半。

有名なる杉並木を過ぎれば、鬼怒の清流は道に沿ひ激しては巨岩に咆哮し、静しては青淵となりてその深さ計り難し。奇岩怪石數十丈天を摩し又碧水に映る。宜なる、關東の耶馬溪の名あるを。

途中、中岩の奇勝を歎賞しいよ／＼温泉郷鬼怒川へ達す旅館は近代式設備完備し箱根別府と並び稱され、その偉容は殆んど断崖にかゝりて溪流に望み、秀麗なる山岳を背景として層樓をなして座ながら雄大壯闊なる風光に接し得る勝地を占め温度五十度、皆内湯にして他に温泉プール等の大設備もある。

又料亭は對岸の一廓を割して櫛比し、名つけて遊樂園とする。その淒艶濃厚なる、本牧熱海のそれを凌駕し特異の

サービスは粹客のひとしく賞美するところ「戀の楯岩とろ／＼淵に濡れて見たのさ鬼怒の淵」の情緒纏綿たるものがある。

名物＝羊羹、木細工、土鉢等郷土色豊なもの多し。

川治温泉

鬼怒川温泉より清流に沿つて上ること十
數分（自動車）翠檜碧水に迫る高原の麓

幽仙境川治温泉に達するを得る。旅館、ホテル等又豪壯なるあり總て内湯を設け又溪流に望みて岩窟の湯等ありてその特色を示してゐる。温泉は享保年間の發見にかかり清澄なる男鹿、鬼怒の二川の合流するところ隨所に温泉の湧出を見る去來する白雲を仰ぎ靈泉に都塵を拂へば氣自ら桃源にあるが如し。又人知れず甘美なる夢を追ふにもし。附近一帯は古戰場であり、名勝舊蹟また多し。

鹽原溫泉

宇都宮より一時間半、千古の謎を秘めた詩の温泉郷である。都大路の黄塵を避け山高く雲深き筈川の邊、自然がその妙を盡せるこゝ鹽原は全溪三十橋、七十瀑、四十五湯の多きを數へ、自然の眺めは花に月に、新緑に紅葉に三伏の苦熱を忘れ嚴冬の寒さを知らず。一度遊んで憂を忘れ二度來りてその歸るを忘るの幽仙境である。名所舊蹟頗る多く、一代の文名と美貌を以て天下に謳はれ悲しくも散つた遊女高尾の碑城主の身ながら父の仇討に破れて淵に沈みし小太郎ヶ淵の哀話等、一木一石皆名あり傳説ある神祕境である。

七不思議

逆杉・一夜竹・冬蓼・夫婦鳥・精進川・片葉蘆・冬桃・

五名石

木葉石・鐘乳石・鮫石・芋石・貝石

那須温泉

「那須の與一は三國一の男美男で旗頭者與一禮讚の里人の唄である。」

晚翠橋を過ぎ、與一おこしの一軒茶屋に澁茶を喫し高原の坦々たる白道の右に毎夏行幸啓を仰ぎ奉る那須御用邸を拜し道は那須高原の中腹温泉郷那須御湯本に入る。温泉は一二八〇年前舒明天皇の御宇狩野行廣の發見にかかる二層三層の温泉宿は兩側にきしめき立ち湯の香強く立ちこめて「那須はよいとこ一度はお出で」の湯もみ唄も懷しく、いかにも湯治場らしい情緒に満ちてゐる。

「湯を結ぶ誓ひもおもし石清水」の俳聖芭蕉の句碑のある温泉神社を下れば三國妖婦傳や三浦之介の白狐退治で有名な殺生石の超科學的の神祕に引きづられる。

タクシーの主なるもの

(イロハ順)

市民アア富丸増矢長第田中ホハ池
二アヅマ

サヅ
街陽ヒマ士通山野岡マ中央レト上

新潟江旭一川一千富清池大曲
石浦野條向浦手島住上脚
町町町町町町町町町町町町

二三二二三三二二二二三二三三三
三一一二七六五二七一〇〇三四九
三九七九八六〇六二六八四六三〇

益馬眞茂烏小石今鹿板日鬼大市内ハイヤ
子頭岡木山山橋市沼木怒谷觀定期乗合
町町町町町町町町町光泉音

一
一〇五七五四五三六三三一七八二二金五
一〇五七五四五三六三三一七八二二金五

一〇五七五四五三六三三一七八二二金五
一〇五七五四五三六三三一七八二二金五

富盛新靜山仙長甲福千横前浦水東
山岡湯岡形臺野府島葉濱橋和戸京

一〇九〇一三二六〇三〇八〇五五九
六八四四三六四四三六三八三六五

一〇九〇一三二六〇三〇八〇五五九
六七二〇一〇八三五四三三六三六五

鳥岡和神大京青大奈福岐金秋
取山山戸阪都森津良井津阜澤屋田

一〇九〇一三二六〇三〇八〇五五九
六七二〇一〇八三五四三三六三六五

宮札鹿長熊大佐福松高德高山廣松
崎幌島崎本分賀岡山知島松口島江

一
一〇九〇一三二六〇三〇八〇五五九
六七二〇一〇八三五四三三六三六五

一
一〇九〇一三二六〇三〇八〇五五九
六七二〇一〇八三五四三三六三六五

各府縣廳所在地ニ到ル軒程

上段杆

下段運賃

(但シ船賃ハ含マズ)

省線 宇都宮駅時刻表

準急 普通 △

上り 上野行
九七六六五五五四三二一〇〇九八七七六五四三三二
〇一四〇二一〇〇三二三五三〇〇一五三三二
七六七六七一〇四五八三三〇五〇〇〇〇四八四六

準急 △ 普通
一九七一〇一九七五二一〇一四三〇五〇五

一九一八〇二三三七〇〇一九七五二一〇一四三〇五〇五
青白仙青仙小青白蘿盛尻小新青新青青奥羽
森河島古森吉田森河島岡内田鴻源鴻森森迎

宇都宮線 東△

宇都宮線 日光行
九七六三一一六通ヨリノリ一九九九七六四
五五〇七〇二豆ミ一〇四二二三〇五三〇五一〇
六九八一一八二六六五〇五五

東武宇都宮駅時刻表

準急 普通 △

季節運行 不定期

急行 行

△一 榆木止

急行 行

淺草雷門行

一〇一〇九九八八七七六五
五五四一五二五二五二五四四四
一一七七〇〇三一三五〇八五

一〇九八七七六六五五四四三三二
三五五二五二五二五二五二四二五
三三三二二二二一四九〇一

宇都宮を遍く紹介すべくこの「宮の花街」をものしたが、案外これらのこととは知られて居るやうで知られてゐないものである。旅のつれぐに、又時折のお出かけの「しほり」として欲しい。

内容はかなり注意して記した氣だがこの小冊子に盛り切るには餘りに多く、只その大要を載せたに過ぎぬ。再版三版を期して訂正したいと思ふ。大方の御叱正を乞ふ。

昭和十年十二月廿五日印刷
昭和十一年一月一日發行

【定價五錢】

編輯兼
發行人 並木謹司

宇都宮市小傳馬町一七

印刷所 株式会社 三共社印刷所

宇都宮市小傳馬町一七

発行所 東北みやこ新聞社

山 料理
工 浦燒

中 托

電話(34) 三三三七一八